

第6回 口腔機能って何だろう？

＝ 「口腔機能（噛むこと）」は、脳を活性化させる ＝

北九州在宅医療・介護塾
塾長 久保 哲郎

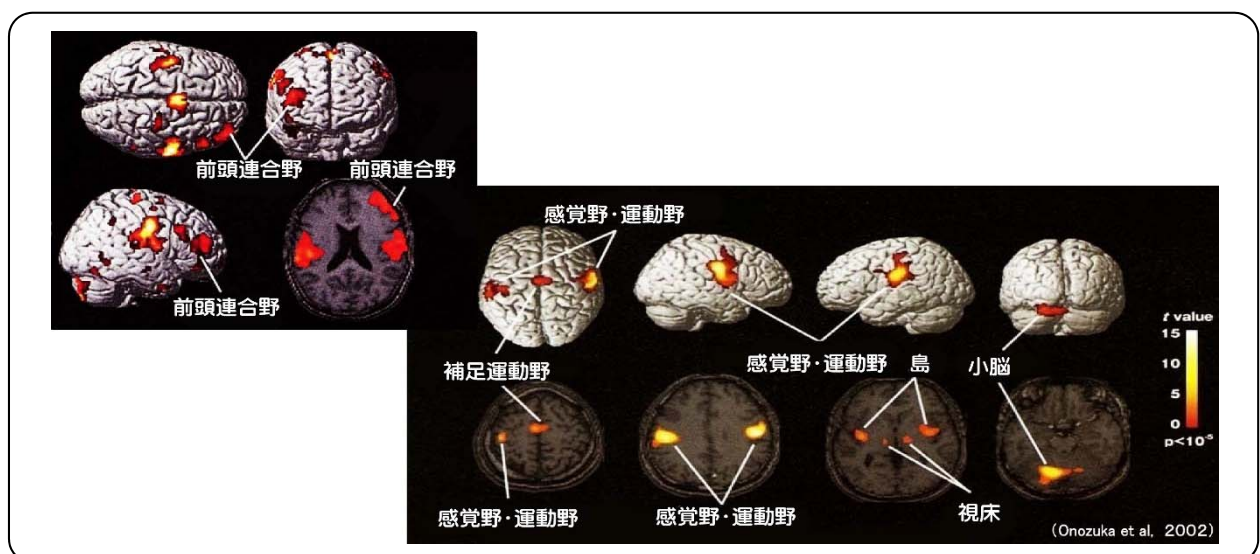
2回にわたって、“捕食⇒咀嚼⇒嚥下”等の口腔の運動機能がスムーズに行われるためには、五感などの感覚情報が脳に入力（感覚機能）され、その情報を脳が認知（認知機能）した後、口腔運動機能領域に運動情報として出力されることが必要ということについて紹介させて戴きました。

このことについて、実験用ガムを噛ませ、光ポトグラフィーを用いた結果について触れてみたいと思います。
実験用ガムを噛みますと若年者も高齢者も同様に、自分の意志に基づいて運動の指令を出す領域（運動野）、体の各部から感覚情報を最初に受ける領域（感覚野）、運動のプログラミングをしている領域（捕捉運動野）、運動や感覚を中継する領域（視床）、運動の学習・記憶を担当している領域（小脳）、及び口や顎から情報を含む様々な情報が入力

される領域（島）等に著明な活性化が認められ、さらに、前頭連合野領域については、高齢者にこの領域の活性化が著明にみられたという結果を得ました。

この結果によって、ガムを“噛むこと”は、ガムの味や、臭い、硬さ、粘着度等に付いて各感覚野がその情報を受け入れ、各々の情報について前頭連合野で認知し、その結果を運動野に送り、小脳を経て“噛むこと”が可能になることがご理解いただけるのではないのでしょうか。

この感覚機能⇒認知機能⇒運動機能の流れを円滑にするためには、気持ちや意欲等のありようが関係してきますので、口腔機能が低下した要介護者や認知症者等に対しては、「その人らしく生きることが出来る環境づくり」、つまり「居場所づくり」が大切な要因の一つになると考えられています。



(小野塚 實著「噛むチカラで脳を守る」健康と良い友だち社、2009)